



シリーズ 感染症や疾病の予防

公立学校共済組合近畿中央病院
脳神経内科医長

ひらやま たかし
平山 喬

パーキンソン病 四方山話

■パーキンソン病とは？

パーキンソン病とは何の病気でしょうか。有名人では米国俳優のマイケル・J・フォックス、ボクサーのモハメド・アリが患った神経難病として耳にしたことがあるかもしれません。もしかしたら既にご親族やご近所の方がこの病気で治療を受けておられるかもしれません。パーキンソン病は、ドパミンといわれる重要な神経伝達物質の不足から生じる運動障害を呈する疾患です。代表的な運動障害は動作緩慢、安静時振戦および筋強剛（関節のぎこちなさ）でございます。パーキンソン病は全世界的な高齢社会を反映してか、今後20年で患者数が倍になることが予測され、感染症の大流行になぞらえThe Parkinson Pandemicと言われるほどです。

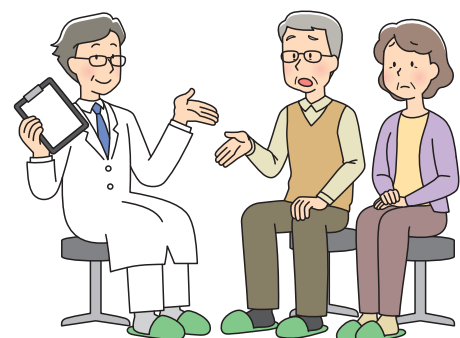
■パーキンソン病の症状とは？

パーキンソン病の代表的な症状は、上述した運動障害に加え、非運動症状もございます。運動症状はあくまで病態の氷山の一角に過ぎず、非運動症状こそが患者様本人のみならず介護される家族様のQoLを損ねる原因となっております。具体的にその非運動症状とは、便秘や頻尿などの自律神経症状、抑うつや気分障害などの精神症状、幻覚や妄想・軽度認知症など高次脳機能障害、不眠・過眠などの睡眠障害があげられます。また執拗に痛みを訴えるまたは痛みに対し過敏になるといっ

た症状にも注意が必要です。この非運動症状でも特に嗅覚鈍麻（匂いが分かりにくい）、レム睡眠行動障害（睡眠中に大声を発する・手足を激しく動かす）、便秘症、抑うつといったものは運動障害発症に先行し、かなり早い段階で出現しているともいわれております。

■パーキンソン病を疑ったら？

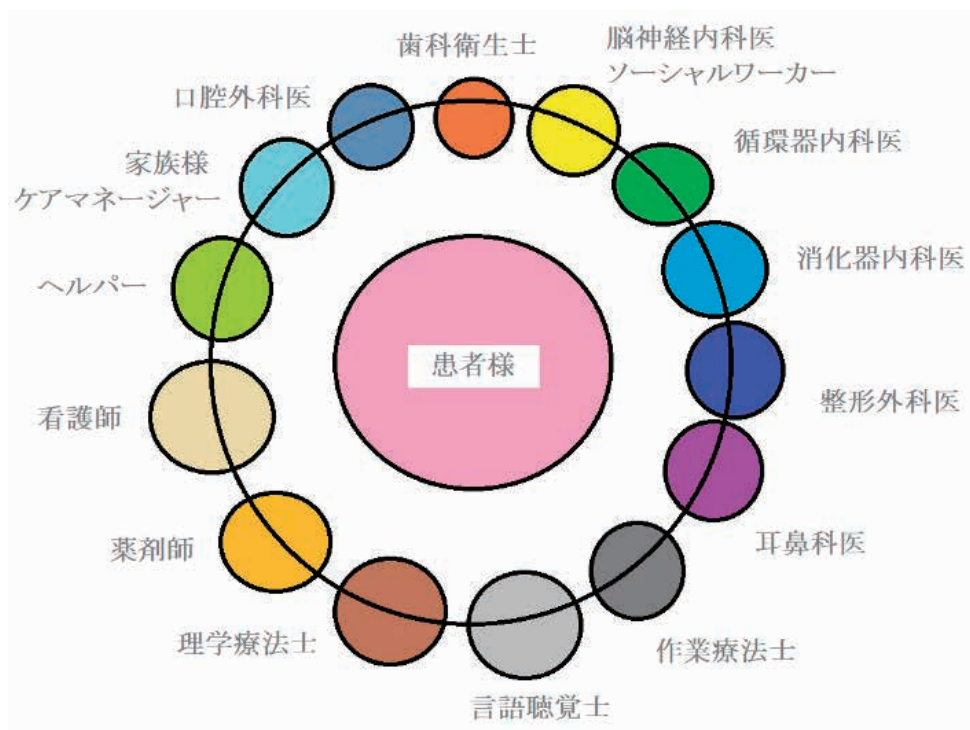
あなたが「最近母の歩きが遅くなったな…」または「父の手の震えや寝言がひどいな…」など身近な人の変化に気が付いたのでしたら、まずは脳神経内科医を訪ねるよう助言してみてください。持病でかかりつけの先生がいましたら、脳神経内科を受診したい旨を率直にお話してください。一般的に脳神経内科医は患者様の信条、生活状況、性別、年齢、嗜好、常用薬などの情報を加味し、診察や検査および治療を提供できるからです。そして何より神経診察を行うことで、無駄な検査を回避し、正しい診断に最短で到達できる能力がございました。



■パーキンソン病の治療は？

残念ながら現時点でパーキンソン病そのものに対する根本治療はございません。しかしながら症状緩和を目的に、ドパミン補充療法を中心とした薬物療法やその他非薬物療法が複数ございます。病初期は、症状軽減可能な必要最小量のレボドパやドパミンアゴニストといった内服薬が中心になりますが、治療後数年経つとその効果が薄れてくるため、複数回かつ複数種の薬剤を適量併用していく必要がございます。近年上市されるようになったレボドパ以外の抗パーキンソン病薬は内服薬であっても高額なものも多く、経済的負担は少なくありません。そのため病期に応じ、指定難病制度等の利用について、主治医またはソーシャルワーカーの方と相談頂くと治療の継続がさらに

円滑になります。症状が進行し、内服薬のみでは十分運動症状が制御できないと判断した場合、さらに高次の治療を検討いたします。具体的には、認知症がなければ脳外科医による脳深部刺激療法DBS、みぞおちに穴をあけ小腸に到達させたチューブから持続してレボドパ製剤を投薬するレボドパ・カルビドパ合剤ジェル腸内持続投与療法LCIGが代表的な処置でございます。最近では薬物持続皮下注射も薬事承認され、進行期に差し掛かってもお治療選択肢が残されている点で、主治医-患者間のみならず、家族はもちろんのこと、看護や介護およびリハビリ職員、薬剤師といった多職種間での協議が重要であることは言うまでもありません。



We are always behind you